OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students

プロフィール（Profile）

氏名（Name）佐々木悠
所属（School）博士前期課程　看護学研究科
慢性看護学分野　CNS コース
学年（Grade）2 年

留学先（Name of overseas institution）
Mahidol University, Siriraj School
In Thailand
留学期間（study abroad period）
2019/2/13~15

留学レポート Study Abroad Report

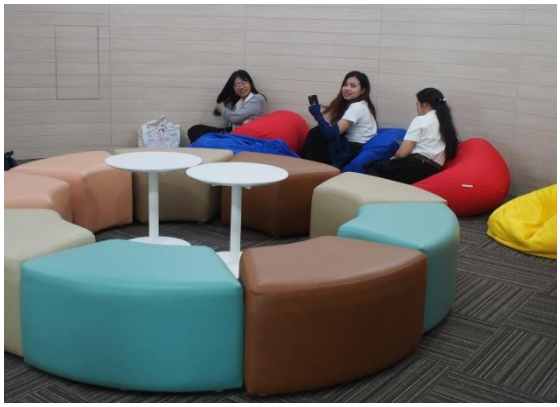
はじめに

今回、タイで開催された慢性病に関する看護学会、International Conference of Prevention and Management on Chronic Conditions のシンポジウムへ参加し、マヒドン大学のサラヤキャンパス、シリラートキャンパスへ訪問しました。英語でプレゼンテーションを行うことやその準備期間が課題研究の論文作成の時期と重なっていたことから、やり遂げられるか不安も大きかったのですが、昨年もラマディボディキャンパスへの訪問や国際学会への参加を通して大変有意義な経験を得ることができたため、今回の参加を決断しました。

マヒドン大学；サラヤキャンパスとシリラート校への訪問

バンコク市内から車で 1 時間ほどの郊外にあるサラヤキャンパスは、現地の学生曰くタイで一番自然豊かな大学ということで、緑に囲まれた大きな校舎でした。そこでは、学生たちの演習、シミュレーション教育に使用する設備、図書館を主に見学しました。特に印象に残っている点は、シュミレーション教育です。人形に患者の病態をセットアップすることで、心電図や心音、呼吸音など看護師が臨床で観察しアセスメントする内容をあらかじめ設定し、その様子をマジックミラー越しの隣室より観察、評価することができるようになっています。実際に患者対応のトレーニングをする学生はとても緊張するそうですが、臨地実習では患者の状態が大きく変化する場面を直接経験することは難しいため、大変有意義な演習ができる設備だと感じました。図書館は非常にきれいでポップなつくりでした。

腕モデル：演習室を案内してもらっている様子



図書館のくつろぎ空間：タイの学生が休憩中です

印象的だったのは、自習・閲覧スペースには机と椅子にコンセントが完備されているほか、PC で音声を聞く際にはランプシェードのような形態のスピーカーが頭上に設置されているなど学習環境が整っていました。学生個人が 1 週間予約して使用できる自習部屋が整っていることや、勉強の最中にくつろげるような広間が設けられていたことでした。演習では採血や吸引などの侵襲的な処置の練習ができるようなモデルが多数揃っており、ポジショニングは学生自身が患者となって行えるよう、広い演習室にたくさんのベッドが準備されていました。このように、臨地実習に出る前に学生が自身をもって看護ケアを行えるような教育がなされていることが分かりました。シリラージキャンパスはシリラート病院と併設されたバンコクの校舎です。

タイの看護の歴史が詰まったミュージアムがあり、解説を受けながら館内を回りました。王妃が看護師であったこともあり、医療や看護の発展には歴代の王室の方々の名前が連なっていました。それも、タイ王国において看護が発展を遂げている所以であると感じました。

さらに、ナースキャップやこれまでのユニフォームの変化、過去と現在のお産の様子をジオラマで再現した展示、大変貴重な昔の医療器具が展示されており、どれも目を引くものばかりで、ガイドをしてくださった担当の方に先に進むよう促されたほどでした。なかでも、インスリン注射のキットや輸液時に使用する三方活栓は、金属で製造されており質感は全く異なるものの現在よく使用している器具と形はそれほど変わらない印象で、昔の人の知恵が受け継がれていることに驚きました。

昔の三方活栓（金属製です）

国際学会への参加を通して

今回の国際学会では、学生によるシンポジウムが企画されており、私たち大学院生はシンポジストとして発表する機会をいただいておりました。テーマは、各国の高齢者に対するヘルスケアシステムです。学会での発表経験も少ない中、英語でのプレゼンテーションに挑戦することとなり、とても緊張して臨みましたが、いざ発表してみると、モデレーターの先生が私たちのプレゼンテーションをラップアップしながら、進行してくださり、「言いたいことが伝わった！」と嬉しくなりました。さらに、他国の発表も素晴らしく、日本と比較しながら拝聴し貴重な情報を得ることができました。具体的には、タイの現状として community-based の高齢者支援を採用している点が日本と似ていたほか、ベトナム、インドネシア、ネパールの各国でも高齢者に対する財源の確保の問題や地域で高齢者が集まり運動する様子を動画で紹介するなど、病院以外での支援に取り組まれている様子が興味深い点でした。これらの東南アジアの各国は比較的日本に近い人口構成や制度と感じましたが、タンザニアに関しては印象が変わりました。それは、疾病構造です。アフリカ地域の各国は感染性疾患が主な死因となると考えていましたが、タンザニアも高齢者が増加しており、NCDs（Non Communicable Diseases）が問題となっているそうです。今まで持っていたイメージと異なり、NCDs が世界的に重要なトピックスであることを改めて感じました。その他の講演においても、NCDs に対して WHO が提唱するアクションプランや目標、慢性疾患モデル、そして人・健康・環境・看護の概念を扱う私たち看護師の役割として教育・研究・イノベーションの観点から広く慢性病の人々への支援の提供を目指していく必要性について学ぶことができました。このように、世界規模での取り組みや現状に関して広い視野を与えていただいたことが、今回の国際学会に参加した一番の収穫かもしれません。

シンポジウムに参加した日本、タイの学生、先生方と

タイの仲間との交流

私は、2017 年にタイで行われた国際学会 WANS への参加と、本学に滞在したタイの交換留学生との交流を通して、タイに友人ができました。その友人たちと学会会場や訪問したマヒドン大学においておよそ 1 年ぶりに再会できたことが嬉しかったです。現在は大学院を修了し、病院での臨地実習を受け入れる臨床講師になったり、アメリカの大学に留学していたりと、それぞれステップアップされていてとても刺激をうけました。また、新たに知り合った仲間もでき、食事に行くなど学会の合間にもタイを満喫することができました。

観光客に人気の“ピンクのカオマンガイ”を食べてきました

おわりに

日常では味わうことのできない海外での経験は、いつでも今まで知らなかった別の世界を教えてくれる気がしています。特に学会では、私が専攻する慢性看護学分野において、世界的な問題とそれに対する看護の力が試されるのだと改めて気づかされました。そして、外国の人たちと共に過ごすことは多くの刺激や感動を得られます。このような機会があればぜひまた海外に挑戦したいと思います。